

「老老介護地獄」から脱出

もう一つ、井野病院（兵庫県姫路市）のしおさきヴィラは「癒しとやすらぎ」を第一に重視する老健施設だ。やさしい木目調で居心地のいい各階の療養空間はそれぞれ「花」（二階）、「月」（三階）、「雪」（四階）と呼ばれ、一階フロアにはお地藏さん、床屋、銭湯のノレン。昔懐かしい町のたたずまいがそっくり再現されている。

現在、ここで療養生活をすごすM子さんは、大正二年生まれの八十六歳。その一階の可愛いお地藏さんの前で毎朝手を合わせ、へ夫婦共々、元気で暮

らせますように……」とお祈りするところが彼女の日課だ。

結婚六十三年目。この施設の「夫婦部屋」でもとに老いの時間を暮らす五つ上の夫は、脳梗塞による老人性痴呆症だ。

そんな老夫婦の姿と出会ったのは、ある午後のことだったが、九十一歳の夫のほうは「夢幻の世界」を生きているのか。何を話しかけても終始無言でその表情は変わらなかった。

この人は、七十代後半まで電機関係の会社を経営し、家庭では典型的なワシマンタイプだったという。そんな夫に仕えて六十年余、控え目な口調で八十なかばの妻が「老老介護」の苦労話をポツリポツリと明かしてくれる。

「（夫は）十年前から痴呆症状が出ました。ひどくなったのは五年ぐらい前から……」

その時点で、夫は八十六歳だった。子供がいないという老夫婦の事情もあり、当時八十一歳の老妻にすべての負

担がのしかかった。そして結局、介護役のほうに二年ほど前、腰をひどく痛めた。第一腰椎圧迫骨折。誰に頼ることもできず、ボケた夫を辛抱強く介護してきた無理がたたったのである。

しかし、ここへ入所して以来ようやく「老老介護地獄」から脱出できたせいか、M子さんはいま、晴れ晴れと明るい表情である。その理由を同施設の看護部長が語る。

「介護の手間が減った分、レクリエーションなどにも一人で参加し、時間的にも気分的にも余裕が生まれたんですね。またワシマンとはいえ、もともと奥さんべったりのご主人のほうも夫婦揃って他の方々と交流することで精神的に安定されました」

現在、週の半分は夫婦部屋で共に寝起きする。しかし残り半分は、施設のスタッフに夫の世話を頼み、別の部屋でぐっすり眠れる。それで体力を温存できるため、M子さんは持病の腰痛もかなりやわらいだ。

「お友達もできましたし、当分は楽しく暮らせます。そして、ここを出たあとは夫婦揃って有料老人ホームのお世話になります」

そんな妻のつぶやきには「私たち夫婦は死ぬまで一緒です」という、年輪を重ねた老夫婦の祈りみたいなものさえ感じられた。